

## 20240910 「終農」の危機！は、新たなビジネスチャンス！？

3校目の渋谷区で5年生を担当したとき、子どもたちに実際に米作りを体験させたいと思いました。苗を分けていただける農家はないかと調べていく中で、埼玉県狭山市の米作り農家と出会いました。その田は、入間川にほど近い所がありました。

この農家さんの米作りへのこだわりは素晴らしく、できる限り自然の肥料を使い、農薬使用も最小限です。夏に伺うと水田には、たくさんの生き物が動いていて、その中にカブトエビもいました。お米の美味しさは言うに及ばずです。お屋敷に隣接する畑では、自然農法の野菜作りもされています。その美味しさは都心のレストランがじかに買い付けに来るクオリティです。

苗を分けていただいて以来、この農家さんとは、現在まで20年以上のお付き合いをさせていただいています。

今年も夏休み中にお訪ねしました。

「今年の暑さは、並ではないね」という話について、

「これまでの経験では、考えられないことが起きているんだよ。」と話されました。

「野菜を育てるって、これまでは、種を蒔く時期が大体決まっていたんだけど、その経験で種蒔きしても、暑さで芽さえ出ないんだよ。」

「蒔いた種は、全部無駄になっちゃったね。」

「せっかく芽が出て、やっぱり暑さにやられてまともな出来にならないんだね。」

「ご近所さんから、お宅の言う通りにやったら今年は失敗しちゃったと言われたよ。」

この農家さんは、80歳近いご高齢です。農家としての誠実無比なお仕事振りで、実績と信頼を確かに積み上げられてきた方です。そのいつもの笑顔が、どことなく力なく感じました。この日も、たくさんの米を分けていただきました。お野菜もお土産にいただきました。いずれも絶品です。

帰りに田を見せていただきました。いつもと同じ、青々とした見事な稲が育っていました。しかし、昨年までは同じように青々と広がっていた周囲の田は、雑草で無残な荒地になっていました。

「止めてしまったのですね。」と伺うと、

「あそこも歳だからね。息子もつがないから、仕方がないんだよ。」

と、残念そうに話してくれました。

とても複雑な気持ちで狭山を後にしました。日陰さえない暑い田畑で精を出す、ご主人と奥様の姿が思い浮かびました。この方々もあと何年、この素晴らしいお仕事を続けてくださ

るのだらうと、とても苦しい気持ちになりました。もし、台風でも来て、この稲の穂が水に浸かったり、倒れたりして駄目になってしまったら・・・と、心配に思いました。

現在のこの国の農業の高齢化問題は、温暖化以上に本当に深刻です。このまま、何もしないでいたら、あっという間に耕作放棄地だらけになってしまうでしょう。リミットはあと数年ではないかと思えます。

しかし、この危機は、逆に新しいビジネスチャンスかもしれません。

- ・長年丁寧に作ってきた土（田や畑）
- ・耕作機械などの農業機械

これを今農家は手放そうとしています。しかし、実は手放すにも売れないのです。機械に関して言うなら、廃棄には手数料すらかかってしまいます。

これらを全てお借りして、「農業法人」をつくってはどうかと思うのです。

「土地」「機械」といった、絶対必要なものはすでにあるのです。つまり、実質資本金ゼロで、スタートできるのです。

なおかつ、経験豊かでその土地を知りつくした元農家の方がご健在です。この方にスーパーバイザーになっていただき、見合った報酬を差し上げるとしたら、全てが生き返ると思います。土地も機械もノウハウも錆び付いてしまわないうちに！

こうした発想や取組は、すでに各地に始まっていることと思います。しかし、まだまだ棄農に追いつかないのが現実だと思えます。ただし、それでも問題なのは、農家の実収入があまりに少ないことです。低価格を望む消費者と、それでは生活できない農業従事者、この金額のギャップに対して、何らかの手を打つ必要があります。

日本の若者が、この農業活性化プランに魅力を感じないのなら、海外から若者をお呼びしてもいいと思います。そのための日本語学校を海外に展開し提携するのも総合的なプランとしていいでしょう。しかし、海外の若い労働力が欲しいのは日本だけではありません。日本より一足先に、ヨーロッパ市場が、海外の若い人材確保に積極的に動いています。そして、提示される賃金は、日本のそれと比べ高額です。しかもほぼ英語でコミュニケーションがとれるために、言語的負担も比べ物になりません。それでも海外の若者に日本を選んでもらうためには、国としての積極的な策が必要になるでしょう。

しかし、海外から人材を呼ぶ取組は、実は、多くの業種でかなりすすんできています。特に建築業界では、外国人がとても目立つようになりました。

日本では、どんどん若者は減っています。しかし地球規模ではまだ増え続けているのです。その若者たちは、学びに飢えています。自分の未来を賭ける場所を求めています。「技能実

習生」のような制度をもっと広く、人間性豊かに充実させ、これから伸びようとする世界の若者たちにとって、日本が学びと自己実現の揺籠になっていくという発想があってもいいと考えます。